

## イタリアの小さな村の輝き

松浦 俊博

テレビ番組『小さな村の物語 イタリア』を見ると、イタリアの村では人々は家族や友人を大切に心豊かに暮らす。若者が一度村を離れても、故郷の記憶を失いたくないと戻ってくる。日本にはこういう幸せな社会はできないのだろうか。

イタリア人と日本人の違いは何だろう。まず、イタリア人は国を信用しない。「家族」「知り合い」「自分の住む村」の順で信頼に値するものとする。古代ローマ共和政の精神である「市民としての徳」を尊重し、自分たちの村を守る。日本人には「村長の言うとおりに」という受け身の態度が見える。

イタリアは古い建物や街並みを保存しながら今の生活にも役立てる。外観はそのままにして役割を受け継ぎ、内部を改造して新しい目的のために活用する。未来を拓くには過去に学ぶべきと人々は理解している。日本はスクラップ＆ビルドが常態化している。

興味ある点として、イタリアにはコメディアンを尊重する文化がある。中世からの笑劇の手法を駆使して政治家や官僚の不条理を描き笑わせる。低俗な「お笑い」に興じず品格を保つ。

このようなイタリア人の自立性や文化意識はどのように育まれるのか。小さな村の物語に出てくる普通の村人たちが、日常会話で自分の生き方を話すのは驚かされる。高校の試験にも筆記のほかに、質問に対して口述で答える討論会形式が取り入れられているようだ。討論しながら自分の意見や主張をまとめる習慣を身に着けるのだろう。自立して横につながれば大きな力が生まれることを知っている。

イタリアばかりでなく、英国でも四十年あまり前にはビレッジのまとまりが強かった。教会活動やお茶会などの日常交流が活発で、その中で培われた共通の不文律であるコモンセンスが人々の生活様式をバランスよく律していた。

村社会のコモンセンスは日本人にも浸透した貴重な不文律であり、調和のとれた行動の原点である。これを伝承するとともに、イタリア人の自立性を取り入れていきたいものだ。